

本タイトルで、3回ほど群馬の文学者を紹介してきたが、段々知名度が低くなり、皆さんの関心も薄くなりそうなので、今回は県内の文学館をご案内して、ひとまず終わることにする。

また、調べながら感じたことだが、近頃の作家は「ふるさと」への関心が著しく薄くなっているように感じられる。あるいは「故郷」を無視する傾向が窺える。都会化・国際化という流れが文学の世界へも入り込み、淋しいながら、『ふるさと』はますます忘れられていくようである。

与謝野晶子紀行文学館

みなかみ町猿ヶ京温泉にあり、「猿ヶ京関所資料館」に隣接している。

晶子は明治中期、日露戦役に従軍した弟を歎き「君死にたまふことなかれ」の長詩を発表、反戦的歌手として名声を博した。「やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君」の情熱的な歌も有名である。夫の歌手鉄幹と共に後年は女子教育に功績を残した。前財務大臣与謝野馨は孫にあたる。

徳富蘆花記念文学館

「群馬県を最も愛した一人が蘆花であるといつてよいであろう」と群馬県郷土史家萩原進氏が述べている。蘆花の作家としての地位を高めた『不如帰』の書出しは伊香保温泉千明旅館から始まっている。

蘆花は九州出身なのだが、徳富家では長姉が富岡製糸へ技術見習いに、次姉が安中市の政治家の後妻となる等いろいろと縁が深く、伊香保へもたびたび来遊した。『自然と人生』は「自然と人間が対立せず、自然の中に人間があり、人間の中に自然があったよき時代を代表する作品」と評されている。



[蘆花記念文学館]

昭和2年2月60歳の蘆花は衝心病で倒れ「いま一度伊香保へ行きたい」という本人の切なる希望で千明旅館へ向った。同年9月、再起の希望もむなしく死をむかえた。

また、東京都世田谷区には旧宅を中心とした「蘆花恒春園」もある。

土屋文明記念文学館

高崎市保渡田町、「かみつけの里博物館」の北方にある。文明は100才の長寿を全うした歌人である。活躍の期間も大正・昭和の全期間に及び80年という長さに亘り、歌壇に君臨・長老として活躍した。昭和61年には文化勲章を受章している。世良田町歴史公園に歌碑があるので紹介してみよう。

「夕暮るる み寺に来う(つどう)浄土絵の
青き山々 灯(ひと)してみつ」
昭和5年園遊した時の作である。

前橋文学館・萩原朔太郎記念館

上記については先にふれたので割愛する。

田山花袋記念文学館

『蒲団』『田舎教師』で有名な田山花袋の文学館は館林市城町にある。



[生家も移築]

花袋は館林に生まれ、家は代々の秋元藩士であったが、父が西南戦役で戦死する等貧窮のなかで育つ。11歳の時に東京へ丁稚奉公に出され、正規の学歴はほとんどなかったが、文学への関心を持ち続け、『ふる郷』が出世作となり、自然主義文学の代表者ともくされるようになった。

『東京の30年』は明治文壇史として また明治の社会や風俗の資料として、貴重な作といわれている。

ふるさとをこよなく愛した人だから、東京を活写できたのだろう。